朝鮮石人像を訪ねて（71）

深田 晃二

～フランスの略奪品ベナンに返還、イギリスにあるベニン青銅器、ブランデージの胸像撤去～

1. フランスの略奪品ベナンに返還

前号の「訪ねて（70）」の 6(1)で、フランスからアフリカのベナンへ 26 点の文化財が返還される事が決まり、現地の受入れ博物館の開館を待っていると述べた。その博物館ができたようで、マクロン大統領が 10 月 27 日に「来月に返還する」と明らかにした、と 10 月 29 日朝日新聞は報じた。ベナンは図 2 のようにナイジェリアとトーゴに挟まれた小国で、フランスが侵略した 1892 年にはダホメ王国があったところである（図１）。

今回返還されるものは、1892 年に侵略した際に戦利品として持ち帰った王の像、王宮の扉や玉座だ。

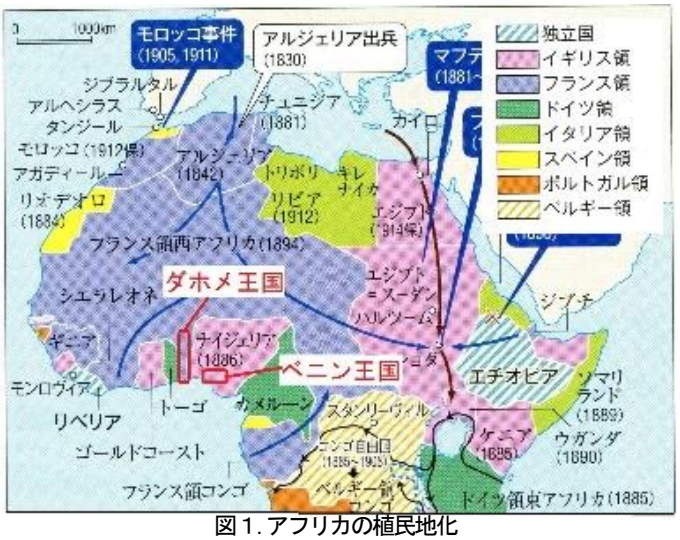

図１. アフリカの植民地化

マクロン大統領は「作品がかつて去った大地に戻り、アフリカの若者が自国の遺産に再び触れられるようになる」「我々は視点を脱中心化し、フランス、アフリカ双方の互いの見方を変える必要がある」と述べ、また、4 万 6 千点以上ある収奪品の「すべてを手放すわけではない」とも語り、返還すべきものの選定方法を法律で定める考えを示した。

アフリカ諸国（エチオピア、コートジボワール、マリなど）は独立を遂げた 1960 年代からずっと旧宗主国に返還を求めてきたが、ことごとく拒まれてきただけに、今回の返却は意味がある、という専門家の意見も報じている。

マクロン大統領の狙いは、アフリカとの関係改善にある。文化財の返却を対等な関係の象徴と位置づけることで、アフリカ系移民を多く抱えるフランスにとって、反仏感情を取り除くことは大事な問題である、と述べている。

別の報告論文[1] によると、フランスでアフリカの文化財を最も多く所蔵しているのはパリのケ・ブランリ博物館で約 7 万点あるという。所蔵するコレクションはすべて国有財産であり、公共コレクションの譲渡不可がフランスの法律によって規定されている。従って、元来あった原産国へ文化財を返還（所有権を移転）するには新たな法律が必要となる。ベナンに返す 26 点とセネガルに返す 1 点（すでに貸与しているサーベル）の計 27 点の文化財を返還する法律が、2020 年 7 月 15 日から閣議で討議開始され、2020 年 12 月にフランス国会で可決され、ようやく 2021 年 11 月に公式に返還されることになったという。下院と上院のどちらも満場一致で採択されたようである。

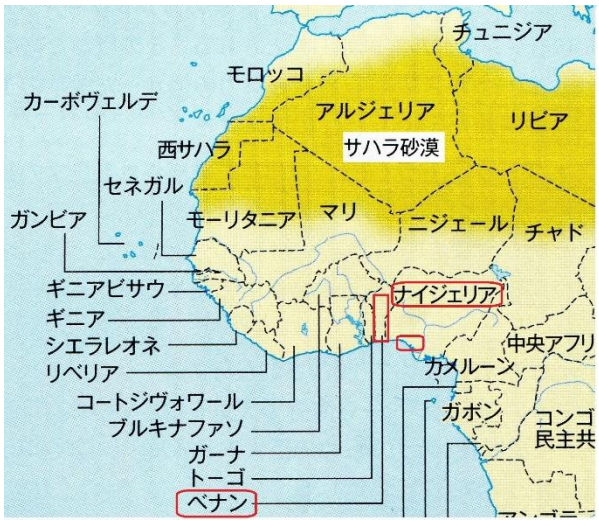

図２．現代のアフリカ

関連の話として、マダガスカル（アフリカ大陸の東の島）は王冠の返還をフランスに要求し、フランスは 5 年間の期限付きで 2020 年 11 月 5 日に一時貸与した。ベナンの法律審議と併せて、この王冠返却法律も 12 月 17 日に原案通り満場一致で可決された。

2. イギリスにあるベニン青銅器

報告論文[1] は、2020 年 5 月 25 日にアメリカで起きたジョージ・フロイト事件（白人警察が膝で黒人の首を押さえつけて殺した事件）を契機として、アメリカだけでなくヨーロッパでも広範囲に盛り上がったブラック・ライブズ・マター（Black Lives Maters＝ＢＬＭ）の抗議運動に伴う、街中の人物像やモニュメントの撤去を中心に述べたものだ。

イギリスでも奴隷制や人種差別を体現しているモニュメントの引き倒しが相次いで起きた。ＢＬＭの抗議運動が高揚すると、多くの博物館・美術館が抗議運動に連帯を示した。しかし、大英博物館館長がＢＬＭ運動に連帯の意思を告げると、ベニン青銅器やギリシャのパルテノン大理石など、植民地時代に

収集された文化財の返還について全く触れていないことに、すぐさま膨大な批判が殺到したという。

すなわち、ＢＬＭの抗議の対象は、奴隷制や人種差別に関与した人物像・モニュメントだけでなく、植民地主義によって確立された博物館や所蔵コレクションにも波及したのである、という。

近年原産国から博物館へ文化財の返還要求が次々に突き付けられ、博物館側は何らかの対応を迫られている。ＢＬＭの抗議運動でさらに返還圧力が高まったが、2020 年にはイギリスで返還に向けて大きな進展はなかった。わずかに実現した返還事例として、地方博物館からカナダの先住民族に、首長の盛装が返還されることになっていることぐらいである。

文化財返還をテーマにした「野蛮な博物館：ベニン青銅器、植民地の暴力、文化財返還」（著者：ダン・ヒックス教授）という本が 2020 年 11 月に出版された。1897 年にイギリス軍の懲罰遠征で奪われたナイジェリアのベニン青銅器を主題に、植民地の文化財を所蔵・展示する博物館の不当性を告発し、文化財返還を主張している。ベニン青銅器を最も多く所蔵する大英博物館を「野蛮な博物館」と揶揄した本のタイトルとなっている。

ＢＬＭによって多様性や包括性が大きな課題として社会全体で認識されるようになり、これからも一層イギリス帝国の過去や倫理が問われ、脱植民地化が展開するだろう。文化財返還の問題はその一部となっている、と述べている。

イギリスでは概して保守層の間で帝国主義の時代を美化する傾向が強い。そもそも多くの人は学校で帝国の支配や奴隷制について学ばないし知らないという。ナショナル・トラストが所有・管理する「カントリー・ハウス」は、以前「エリート家族のイギリスにおける社会的地位に焦点を当てて解釈」していたが、近年「過酷な奴隷制で得られた富、イギリス帝国による世界収奪の歴史的産物」という新しい見方を提示しているのだという。

日本の帝国主義時代の評価・認識についてと、多くの人が歴史知らない点はよく似ているが、日本ではＢＬＭに連動した文化財返還運動の高まりはまだ始まってはいない。日本の周回遅れが目立つと著者の森本氏は述べている。

３．アベリー・ブランデージの胸像撤去

今年は大方の反対を押し切って無観客で東京オリンピック・パラリンピックが開催された。多大な借金の付けは国民へ回ってくることは必定であろう。

来年は冬期北京オリンピックが予定されているが、女子テニス選手のセクハラ問題や、新疆ウイグル自治区の人権問題などで、アメリカは関係国に、政府関係者を参加させない「外交的ボイコット」を呼びかけている。

1968 年メキシコオリンピックの表彰台で「ブラックパワー・サリュート」があった。トミー・スミス（金）とジョン・カルロス（銅）が黒手袋のこぶしを突き上げ、アメリカの公民権運動に連帯の意思を示した。

図 3.　1968 年表彰台

この行動のため、時のＩＯＣ会長だったアベリー・ブランデージは怒り、両選手は出場停止処分となって選手村から追放された。

サンフランシスコのアジア美術館は、ブランデージが収集した 8 千点近いアジア美術品をもとにして 1966 年に設立された。ブランデージは、建設業と投資によって巨財を形成した。

アジア美術館はアメリカでアジア美術品を最も多く所蔵し、年間 30 万人が訪れる。2020 年 6 月に館長は、ホールに目立つように設置されていたブランデージの胸像を倉庫にしまうと声明した。50周年を準備している際に。ブランデージの人種主義者、反ユダヤ主義（ナチス支持者）であることが判明し、2016 年から撤去を計画していたが、ＢＬＭ抗議運動が後押ししたと述べている。

図 3 ではわからないが、2 位に入賞したオーストラリアのピーター・ノーマンも、二人とともに抗議バッチを付けて表彰台に上がり、オリンピックから追放された。

一時期は孫基禎がそうだったように、人権を主張した人は差別や弾圧をされる事例である。

しかし、その後、彼等は名誉を回復する。ノーマンとトミー・スミスとジョン・カルロスの連帯は硬く、ノーマンが死んだ時にはトミー・スミスとジョン・カルロスはオーストラリアまで行って棺を担いだ。

図 4.　ノーマンの棺

ロンドンオリンピックの前に、ジョン・カルロスはロンドンでの講演で、「ブラック・パワー・サリュートのあの行為は、ベルリンオリンピックの孫基禎の行為を見てインスパイヤされたのか」という質問に対し、「まさにそうだ」と言ったそうだ。孫基禎の控えめな抗議運動がジョン・カルロスに繋がり、世界のＢＬＭ抗議運動や、虐殺された黒人の名前を書いたマスクを着用して全米オープンのコートに立った大坂なおみに連なっていると思う。　（続）

（参考文献）
1）ブラック・ライブズ・マターとモニュメント・文化財
–加速する脱植民地化の動き–、森本和男、2021.11、ネット配信
http://wwwasahi-net.or.jp/~vi6k-mrmt/culture/korea/data/ronko/mr202108/mr202108.html